



Borderless Art Museum NO-MA

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA



ニュースレター 4号

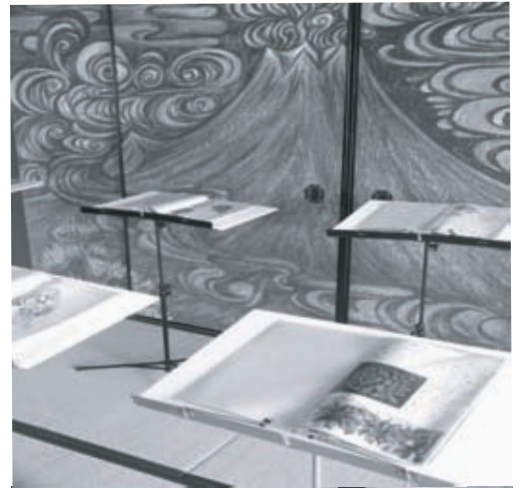
快走老人録 ～老いてますます過激になる～

2006. 9. 16(土)～11. 15(水)

「老いる」事は、「衰えゆきオトナシクお世話されること」ではなく、「最後のエネルギーを臆面なく発揮し切って生きること」と、捉え直すという過激な企画だった。障害も健常も無く、ある意味全員アウトサイダーアーティストのご老人たち。様々なアート媒体にも大きく取り上げられ、チラシデザインも話題となった。展示会場を、日牟礼八幡宮近くに建つ江戸末期の旧吉田邸を第二会場に加えた初の試みだったが、町屋のまんまの空間は人の気配さえする魅力的な屋敷であった。開館以来最高の入りにもなった。

観覧者のアンケートより

- とってもパワフルで活力が溢れててすごいなあと感じました。
80才でも70才でもこんなに生き活きしているのだとびっくりしました。(30代 女性)
- この建物と展示が違和感なくとけ込んでいました。作品の力と、空間の空気が調和していました。(30代 女性)
- ただただ圧倒されるばかり、生きている事がアートという感じを得た。ボーダレスですね。(50代 男性)



ウチナル音～身体音からの造形～ 2007. 1. 27(土)～3. 18(日)

2005年に引き続き、「2006 ボーダレス・アート企画公募」と題して、ボーダレス・アートミュージアム NO-MA のコンセプトにマッチした企画を公募するこの事業が始まったのが、まさに風薫る爽やかな2006年5月。2ヶ月間の応募期間に寄せられた15ほどの企画の中からこの「ウチナル音～身体音からの造形」が選ばれ、そこから約半年かけて、企画を展覧会という形に練り上げてきた。全ての作品から音を感じられる。が、不思議と違和感の無い空間。それぞれの作品が奏でる音は、どれも違いつつ絡みあっている。作品から発せられる音と自分の身体の中に流れる身体音について耳を澄ます、視角ではなく、聴覚を澄ます。そんな展覧会となった。



ウチナル音 企画者 クシノ ノブマサ氏

第3回目となる「ボーダレス・アート企画公募」が今年も始まった。ボーダレス・アートというジャンルの斬新な切り口の展覧会企画を募集している。その展覧会にかかる経費250万円だけでなく、アート・ディレクターの旅行経費など60万円を使い、自分の思い描いていた展示を現実のものとするまたとない機会である。

選考委員会に、京都大学名誉教授であり医学博士でもある山中康裕氏や、京都造形芸術大学で教授をつとめ、自らもアーティストとして活躍する藤本由夫氏など7名の審査員を迎える。選考のポイントは、斬新でユニークな企画である事、NO-MAのコンセプトにあっていないこと、ただそれだけである。

2007 ボーダレス・アート企画公募

締切は8/3(金)必着。応募様式は、NO-MAに連絡し、取り寄せることができます。

また、NO-MAのホームページ <http://www.no-ma.jp/> からダウンロードできます。



アール・ブリュット・コレクション 2006. 11. 10(金) - 11. 21(火) ルシアン・ペリー館長来日プロジェクト紹介

去年の11/10~11/21にスイス・ローザンヌ市にあるアール・ブリュット・コレクション（美術館）ルシアン・ペリー館長が来日し、NO-MAとの連携のもと、滋賀県をはじめ全国各地で日本のアール・ブリュット作品の調査をはじめ、ワークショップ・シンポジウムなどを行いました。

アール・ブリュットコレクション（collection de l'Art Brut）は1976年の創設以来、世界最大規模の約2万点の作品収集を誇っている、いわゆるアウトサイダーアート作品専門美術館です。ヨーロッパの当時の芸術家たちは、日本の障害者アートの発見に先立つこと5~60年前、主に精神障害者や専門教育を受けていない人々が独自の発想力で描いている絵画などに魅了され、熱心に作品を集めていました。中でもフランス人の芸術家ジャン・デュビュッフエは欧米を中心として5000点を超す作品収集をしており、そのコレクションの寄贈を基にこのアール・ブリュット・コレクションは創設されたものです。世界中から年間約5万人の観覧者があり、多くの人々に人間の表現力が持つあるがままの不思議な魅力を伝え、深い感動を与えています。

記念対談

2006. 11. 17 (金)

会場：野間清六邸

（滋賀県近江八幡市）



語り手：ルシアン・ペリー（アール・ブリュット・コレクション館長）

山中康裕（京都大学名誉教授、医学博士、京都ヘルメス研究所所長）

司会：はたよしこ（ボードレス・アートミュージアムNO-MAアート・ディレクター）

アール・ブリュット・コレクションという場所

ルシアン： まず初めに、このような素晴らしい場所にお招きいただき心から感謝したいと思います。

アール・ブリュット・コレクションというミュージアムは1976年、ちょうど30年前にオープンしました。このミュージアムには、ジャン・デュビュッフエという前衛のアーティストが集めた作品が収蔵されており、Art Brut（アール・ブリュット＝生の芸術）とは彼自身が名づけた名前なのです。入館者は毎年増えていて、スイス国内外からの入館者が年間5万人にも上っています。

このミュージアムに一度入ると、出るときには全く別の人間になってお帰りになるのではないのでしょうか。何故なら、このミュージアムに収蔵されている作品は、いずれも今までの美術の概念を覆すほどの驚きをもたらす作品達だからです。

実際このArt Brutというのは、私たちに芸術について本質的な問題というのを投げかけていると思います。つまり芸術とはどこから来たのか、それは何の役に立つのか、

う本質的な疑問です。ですから、このミュージアムを訪れる時、観客は二重の経験をするのだと言えます。それは美しいものを見た、あるいは芸術に触れたという強い感動の体験です。それと同時に、もっと知的な部分で考えさせられる、先程言った芸術は何かとか、そういった心と頭の両方に訴えかけられる経験。こういった二重の経験をさせてくれるのは、このミュージアムの他にはないと私は思います。

決して心の休まる経験だけではありません。どちらかという、心を不安定化させるような経験なわけです。これは、人間の心の非常に深いところで起こる経験です。そして、これまで自分が信じていた価値、美しいものはなにかという判断基準をもう一回再検討を迫られる、そういった経験だと思います。

秘密・沈黙・孤独

Art Brutを理解するには、三つのキーワードがあります



こういった作家というのは、自分自身を芸術家として認知してほしいと一度も思ったこともなく、また自分が創作活動を行っているとも思ってないわけです。創作活動は先ほど言いましたように、三つのキーワード、「秘密、沈黙、孤独」の中で行われていますので、よく耳を澄ませて、目を凝らしていなければ、どういうことが実際の活動かというのは分からないわけですし、本人が制作の方法を解説してくれるようなことはありえないわけです。そういう意味でArt Brutの研究というのはなかなか難しい問題です。

私たちはArt Brutの作家を発掘したいと思っているわけですが、彼らと出会うためには、作家達と私たちの仲立ちをしてくれる人が実際には必要です。それは、医師、精神病院、あるいは分析家かも知れません。また、アーティストの親類あるいは家族かも知れません。私たちは、そういう人達を通じて、社会の枠の外に出て、孤独に創作活動をしているアーティストを知ることになるわけです。

Art Brutの歴史というのを考えてみますと、こういう仲立ちをした人々が大変重要な役割を果たしたというのはよく見えてきます。ジャン・デュビュッフェがコレクションした1930年代から60年代ごろ、彼の元にこういう作品の所在を知らせてくれたのは、医師や精神科医です。しかし、実際に患者が描いた作品に芸術的価値を見出すという精神科医は少数派でした。多くの精神科医にとって、患者の描いた絵は、自分が患者に対して下した診断を裏付ける手段としてしか見ていなかったわけです。

山中先生にご質問なんですけれど、先生も精神科医でいらっしゃるんですが、一般的な精神科医はどういう目で見たいと思いますか。どういうふうな価値を患者の作品に見出していたのかお聞かせ願いたいです。

精神科医とArt Brut

山中： 私は、このアール・ブリュット・コレクション館長であるルシアンさんとお話できるのをとても嬉しく思います。Art Brutが最初に始まる時、誰が一番影響を与えたかという、ドイツのハイデルベルク大学のプリンツホルンという精神科医でした。彼は、主に統合失調症と呼ばれる人達が描いたとても異常な絵を、沢山集めたのです。(ハイデルベルク・コレクション)しかし、実は患者さん達を、「孤独・秘密・沈黙」というような状況に身をおかせると、異常な絵が出やすいんです。その異常な絵ばかりを集めていると、どうなるかという、先ほどちょうどルシアンさんがおっしゃったように、自分の下した診断の証明になるという形で、まさに利用していたんです。そういう態度では患者さんの病気は治らないんですね。私はどう考えるかと言うと、患者さんとは言葉の対話ではなくて、絵画とか彫刻とか、作品で対話する。そういうことをやっていくうちに、自分の中の異常性が表出されていって、だんだんと自分なりの表現が出てくる。すると患者さんは自由になっていけるわけです。

実は私には、そういう研究者たちの国際学会の名前を変えるよう提案し、実現した事があるのです。もとの学会の名前は、表現病理学会でした。要するに、「表現されたものの中に病理を見出そうとする学会」。だから、異常性ばかりをみつけていく学会でした。そんな医者はいません。医者であるならば、患者さんがそういう絵をなぜ描かなくてはいけないのか、そういう必然性をちゃんと理解し、病理を乗り越えて、自分自身が自分で歩くことを見つけていくその過程を見出すお手伝いをす

際的な学会の名前を私の提案で変えたのです。患者さんが持っている本当の意味で生きていこうとする力。それをどうやって見出していくのかっていうことが大事だと思うのです。

アール・ブリュット・コレクションはまさに自分が生きている姿そのものを示している作品を展示しておられるわけです。とても素晴らしいことです。ただ、私の立場から言うのですね、その人達の対話の部分をどうするかということがちょっと気になるわけです。孤独のままにおいておくことは、その作品を同じレベルでキープすることは出来ないのですよ。その乗り越えていくこと、自分が真の自分になっていくことを可能にしていくことが私の目的なのです。そのところで例えば、はたさんもボーダレス・アートギャラリーNO-MAIにおいてディレクターをしておられる理由は何かって言ったら、例えば知的障害者と言われている人達が、自分なりに生きてゆく、その生きていく過程で生み出されていくその作品と関わっておられるわけです。その生き様が普通の世間で芸術家だとか何とか言われている人達と、共通する部分があるどころか、その一番根源の部分表現しているってことにお気づきになったわけです。

診断のために絵を使うとか、診断のためにおもしろそうな絵だけを集めるっていうハイデルベルク・コレクションではなくて、生きる姿を集めているArt Brutに私は賛同するわけです。

ボーダレスという志向

はた： 今、山中先生がおっしゃったことは余分なお話を全て吹っ飛ばして、まさに真髓のところ、ボーンとダイブさせてくださったんですけど、お話の角度を変えてちょっとお伺いしたいのが、ボーダレス・アートギャラリーNO-MAで目指していますインサイダーとアウトサイダーのボーダレス、という志向ですけれども、その方向性についてルシアンさんはどのような感想をお持ちでしょうか。

ルシアン： ちょっとその前にですね、ボーダレス・アートギャラリーNO-MAでやってらっしゃるボーダレス・アートの内容ですけれどもすでに知られているプロのアーティストとそれから独学でアートを学んで、あるいは自分をアーティストと言うような位置づけをしていないような人。そういう両者の作品をコラボレーションさせようということですね？

はた： はい。私がそういうことを考え始めたのは、Art Brutの作品との出会いからです。そういう作品と出会っているうちに、確かに彼らが背負っている背景とかは、あまりノーマルではないけれど、表現したその作品の中に流れるある種の衝動だとか表現意志だとか、そういうものは、特に前衛的なアーティストが目指している未知の部分にチャレンジしてゆこうというパッションととても共通していて、つながったものを感じたんです。

ルシアン： 私はArt Brutというのはこれまでの常識に従わない、基準に従わないアートの事を言っているんですけども、日本にはそういったものに対する潜在的な強い関心というものがあると思います。そういう意味でNO-MAはその観点にスポットを当てて紹介しようとしているように感じました。私は日本に来て数日過ぎてきた中で、人々の間にもまだ少数派ではありますが、これまでの基準 出した、マージナルなものを求めるというニーズ

からはみ出した、マージナルなものを求めるというニーズがあるというふうには私は感じています。未だ両者の間に大きな溝があると思いますが、NO-MAは、その溝を埋めようとしてらっしゃるという感じがしました。

それから、Art Brutという言葉についてなんですが、しばしばArt Brutというのは、精神病患者が作った作品というふうに誤解されがちです。しかしながら私のミュージアムにありますArt Brut作品の作者は必ずしも精神病人の人達ばかりではなく、社会的に排除された人達です。囚人、霊媒師、それから特別エキセントリックな人もいますし、いろいろいるんですけども多くの人は、精神病院に収容されたことなどないような人達です。職業も炭鉱夫や農家の労働者であったりします。つまり普段は他の人と同じような社会生活を営んでいますけれども、夜になるとあるいは長い休暇になると、何処か隠れた場所で先ほど言った「秘密・孤独・沈黙」の中で創作活動をする人達です。こういった人達は、決して精神科医から精神病患者であるという診断を受けたことはありません。精神病ということが共通項ではなくて、その独創性、もう一つは自由であるということですね。

先程の山中先生の意見と違うかも知れないんですが、Art Brutの芸術家達は、知られたいとも思っていないし、認められたいとも思っていないし、そういう必要があると思いません。ですから誰かと対話したいというふうには思っていないと思います。彼らは、自分達の世界を持っているわけで、自分自身が作り上げた非常に居心地のいい孤独だと私は思います。

孤独との対話

山中： とてもよく分かります。Art Brutの生き方について僕は、それはそれで一つのあり方で、彼らが自分らしくあるあり方を「そのままそれでいいんだよ」という形で生かしてるわけだから良いと思います。

無論、「僕は一人だけでいいんだよ」と言っている人がいないとは思いません。だけど私の考えでは、実はどういう風に生きようとしても結局は阻害されるし、そういう生き方を一切周りが認めてくれないからこそそうなると思うのです。もしコミュニケーションが取れるのなら、その人の「窓」を開けてあげると、その「窓」でコミュニケーションを取る人も出てくるのだと思うのです。コミュニケーションを取りたい人もいるのだよというのが私の主張であって、そのことに理解があり、適切に関わる人が傍にいれば、表現は違ってきます。だから僕はArt Brutの表現だけがそういう人達の全てだと私は考えていないのです。Art Brutは素晴らしいです。私は否定どころか羨ましいとすら思っているくらいです。そういう人達の存在を認める人達がいるんだから。だけど、それだけだったら精神科医なんていらなくてよ。望んで精神病になった人達は一人もいないのに、「そういう生き方でいいよ」と言うわけにはいかないから。彼らはそういう生き方がいいと思っていないんだもの。精神科医ってというのは、そういう人達のために存在する医者なんです。彼らを閉じこめたり、彼らを抑圧する精神科医も沢山いるのだけれども、私はそのような人達は本当の医者だと思っていないのです。だから、ルシアンさんのお答えに対しては、意見が違って当たり前だと思っています。

交差点としての芸術

ルシアン： 山中先生のおっしゃっていること、よくわかります。実際、Art Brutとというのは、どういう見方をしても受け入れてしまえるようなアートであるということなんですね。何をいいたいかといいますと、私のミ

は、色々な人達が交差する。まさに交差点のような場所だと思っています。あらゆる年齢の人、あらゆる社会階層の人が、このミュージアムを訪れます。素晴らしく高尚な芸術ではなくてもわかってもらえる、それぞれのひとが自らの感性で鑑賞できる、それが、Art Brutの特長だと思っています。芸術的な知識や文化的な知識がなくても受け取れるのです。

はた： 今、通訳の片岡さんが「交差点」と言う言葉で訳してくださいましたけれども、まさにギャラリーNO-MAも「交差点」という言葉をパンフレットで使っています。先ほどから山中先生がおっしゃっていた、孤独と対話の問題ですけれども確かに、本人はとても孤独な状態にあるのかもしれないですが、例えば、こういうギャラリーとかアートを通して、可能になるコミュニケーションというものがあるというところに、大きな意味があると私は思っているんですね。そういう人が作った作品が色々な人と、作品を通してのコミュニケーションをするという場としてのギャラリーというのは、とても興味深い場所です。そして結果的に、今ルシアンさんが言われたように、いろいろな価値観の人が、その作品に出会って、様々なフィードバックを受けるという、そのことが、私はとても魅力的なことだと考えています。

山中： 世の中からは、精神障害者だとか、知的障害者だとか勝手なラベルを付けられている人達は確かにいるのかもしれないけれども、その人達は、その人達なりに生きていて、生きていく表現の中の一つとして作品を作っている。その作品が、人間の持っている根源的なものを素直に表現しているんですね。だから、Art Brutに行きたいとかNO-MAで表現を共有したいという欲求が必ず起こるわけです。人間には根源的にこういう部分があるんだ、こういう部分があってもなにもおかしくないんだよ、という形で自分を認めることができる、そういう場所が必要なんですよ。

むしろ、今の世の中の方がおかしい。なぜおかしいかと言ったら、表向きのことばかり言っているからです。嘘をつかない、本当は人間の心の中にこんなことがあるんだと。アグレッションがあり、セックスがあるんだと。そういうことの表現の根源が、アートの作品でありNO-MAの作品であると思っています。そこら辺のものの見え方と考え方を、根本的に変えていかないと。綺麗事だけが美術じゃないんです。社会をどうやって改革するかということは、革命だけでないんです。そういう美術とか生き方の問題で変えていく。一人一人のための世の中なので。そのことについて、芸術という姿をとっているのが、Art BrutでありNO-MAであるのだと私は考えています。

インナーチャイルドと成熟

ルシアン： 私はミュージアム内で、入館者から、よく耳にする言葉があります。「私もすごく絵が描きたくなった」そういう言葉を聞くんですね。皆さんもお感じだと思いますが、低年齢の子供というのは、創作活動と非常に単純な関係を持っています。例えば音が聞こえてきただけで、歌を歌いだしたり、踊りだしたりというのをすごく自然にやるんですね。こういった創作活動を、いかなる禁止や遠慮もなくやるわけです。しかしながら、学校に行く就学年齢になってくると、そうではありません。学校というのは、学科というのを大事にして、身体による表現あるいは絵というのをどちらかというと過小評価してしまう傾向があります。そして成人するにつれだんだん自分の中にいた子供、つまり創作活動を誰に頼まれることもなく自発的にやっていた子供が自分の中で眠ってしまう、あるいは死んでしまうということが起こ

このArt Brutの作家達というのは、どちらかというとなんて反逆人なんですね。何に反抗しているかという、もともと自発的に創作活動をしていて自分の中に住んでいる子供が眠ること、あるいは眠らせることを拒否した人達なのです。

はた： 山中先生にお伺いしたいんですけども、今ルシアンがおっしゃった、自分の中に内在している子供の部分と表現の問題についてお話をください。

山中： とても本質的な部分ですよ。特に芸術において自分の内なる子供、「インナーチャイルド」って普通言われる、これをどれだけ大事に出来るかということとの関数なんですよ。創作というのは、子供はシンプルで素朴なんだけども、実はすごく残酷ではっきりと物を見ている存在でもあるんですよ。また、気付きや驚きの心、要するに全て新しく物事を発見し驚くという側面もあるんです。今日お昼ご飯の後で羊羹が出たら、ルシアンさんは一所懸命眺めては、写真に撮って好奇心満々で食べておられました。まさに内なる子どもが出ていましたね。あれが実は創作の根源だし、人間への興味の根源だし、物事の活動力の根源なんですよ。ところが大人になってくると、そういう子供性を否定したり、抑えてきたのは教育だったと思うのですね。

私が精神科医の中で最も尊敬する中井久夫という神戸大学の先生に「先生、成熟とはどういうものをいいますか？」ってお尋ねした時、先生は何ておっしゃったと思いますか。「それは、“退行の湯浴み”（ゆあみ：赤ちゃんの時代に遡ってお湯の中に入っているような感じのこと）。一

しむことが出来る能力。」、と彼は言ったんです。要するに成熟というのは普通の人考えるように、物事の酸いも甘いも噛み分けて、っていうことだけではないという事です。

ルシアン： それはとても興味深い言葉ですね。それからもう一つ、最後に言っておきたいことがあるんですけど、つまりArt Brutと子供の絵というのは違うということです。そういうふうにならざるを得ないことが多いんですけども、全然別物です。Art Brutのアーティストというのは皆成人です。人生を何十年か歩んできた上でその制作を行っているわけで、非常に粘り強いということがあります。本人なりに真剣に考えて非常に熟考して作業をする芸術家なんですね。子供が10分ぐらいで描いてしまうような絵とは全く違う性質を持ったものだということをお伝えします。

締めくくりみたいになってしまったんですが、ポールは皆さんの側に投げてあります。皆さんの側でこれからどうするか決めていただきたいと思います。是非、ギャラリーNO-MA、あるいは私のミュージアムに皆さん訪問していただきたいと思います。そこで驚かれるような、圧倒されるような表現を発見されたいと思います。是非そういった作品を身近に見ていただきたいと思います。そうすれば皆さんがアートに求めているものを必ずやそれが何かということも分かりますし、それを見つけていただけるのではないかと思います。またそのことによって、皆さんがこれまで「芸術というのはこれだ」というように固く信じている確信をもう一回見直していただきたいと思います。

2008年アール・ブリュット・コレクション 日本のアウトサイダーアート展 ～（仮称）東と西の未知なる出会い～

2008年にボードレス・アートミュージアムNO-MAとの連携によるアール・ブリュット・コレクション収蔵作品と日本国内の障害者作品とのコラボレーション展を開催。

展覧会場および展覧会期

● 1月17日-2月17日

北海道立旭川美術館

(北海道 旭川)

● 2月28日-5月11日

ボードレス・アートミュージアムNO-MA

+旧吉田邸 (滋賀県 近江八幡)

● 5月24日-7月20日

松下電工汐留ミュージアム

(東京都 新橋)

アール・ブリュット・コレクション収蔵作品のポスター販売中!!

2,000円～

ご希望の方はNO-MA
までお問い合わせ下さい。



6